
妹みたいで

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹みたいで

【Nコード】

N1726L

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

幸平と遙は幼馴染み。幸平はその遙がいつもとても心配でその感情が遂に。幼馴染みものです。

第一章

妹みたいで

若槻遥は草加幸平と同じ大学に通っている。しかも同じ学部で同じ学年である。しかも歳まで一緒という何処までも同じ立場である。幸平は鋭い目をしていて眉も細くしっかりとしている。目つきは険しいものにさえ見える。黒い髪を短くしており上の部分だけやや伸ばしている。背は百八十を超えている。

それに対して遥は茶色の髪を後ろで束ねポニーテールにしている。顔ははっきりとしたものである大きい目の光も確かだ。背は一六〇位ですらりとした身体をしている。

実は二人の付き合いは長い。大学だけではない。

「ねえ」

「何だよ」

ある日同じ講堂にいる時にだ。遥の方から幸平に声をかけてきた。

「聞いた？江見ってね」

「江見？」

「江見よ。前田江見」

「前田っていったら」

「ほら、一年の時のクラスメイトだった」

遥は笑いながら彼に言ってきた。

「覚えてるわよね」

「それは小学校一年の時の話か？」

幸平はここでやっと思い出した。小学校と中学校の時の同級生である。

「確か」

「そうよ。思い出した？」

「その前田か」

「そうなのよ。あの娘のこと覚えてるわよね」

「殆ど」

これが返答だった。

「覚えてないんだけどな」

「何よ、同じクラスだったのに？」

「小学校一年の時だろ？」

幸平はたまりかねた顔で遙に返した。

「それと二年で」

「二年も一緒にいた相手のこと忘れるなんて薄情ね」

「薄情も何もそんな昔のこと覚えているものか」

たまりかねた顔でまた言葉を返す。

「十数年も前の話を」

「私は覚えてるわよ」

遙は笑って幸平に告げる。

「ちゃんとね」

「俺は覚えてない」

幸平はたまりかねた顔で返す。

「何でそんな昔のことを覚えてるんだ」

「覚えているわよ。それでだけれどね」

「ああ。それで？」

「江見が結婚するのよ」

そうするというのである。

「来年の六月にね」

「六月か」

「凄いわよね。もう結婚するのよ」

遙は目を輝かせて語る。それはまさに夢見る顔になっている。

「二十歳でね」

「早いつていったら早いかな」

幸平もその話を聞いて述べた。

「それは」

「そうでしょ。それでだけれどね」

「ああ、それで」

「あんたも式に出るの？」

遙はにこりと笑って幸平に尋ねてきた。

「それでどうするの？」

「何で俺が出るんだ？」

幸平はその目を思いきりいぶかしめさせていた。

「何でなんだ、一体」

「だから同じクラスだったじゃない」

「十数年前だぞ」

「それでも同じクラスだったじゃない。だから出ないの？」

「出ないって言ったらどうなるんだ？」

「あんたって冷たいわね」

こう言ってきた遙だった。

「随分と」

「そういう問題か？」

また怪訝な顔で返す幸平だった。

第二章

「そんな昔の話で」

「私が出るわよ」

遥は笑って彼に言ってきた。

「じゃああんたもね」

「出るっていうのか」

「式後のパーティーね」

出るのはそれだというのだ。パーティーにだ。

「出るんでしょう？ いいわね」

「断る選択肢はないのかよ」

「あのね、あんたが断ったらね」

遥は急に弱い顔になってきた。その顔で言ってきたのだ。

「私一人になるのよ」

「一人か」

「そうよ、一人よ」

また幸平に対して告げる。

「それってどうなのよ」

「一人でもいいじゃないか」

「そうじゃなくて。私一人で行けっていうの？」

遥の言葉は続く。

「私一人で」

「一人で行けるだろう、パーティーには」

「あんたが来てくれないと駄目よ」

なおも言う遥だった。

「絶対にね。わかったわね」

「わかった。嫌っていう選択肢は俺にはないんだな」

「ええ、そうよ」

遥の顔が笑顔に戻った。

「その通りよ。いいわね」

「わかった。それじゃあな」

こう話してそれでここでの話は終わった。だが幸平は講堂の中で
惘然としたままであった。その顔で自分の前に座った遙を見るので
あった。

「全く。こいつは」

これまでのことを思い出しながら呟く。

「子供の頃からな」

何しろ小学校からの付き合いである。それを思い出すのだ。

いつも威勢よく言うが実際は何もできはせずいつも幸平が面倒を
見ている。勉強でもある。彼が勉強を教えてそれで高校も大学も同
じになったのだ。その彼がである。

そうしてだ。さらに思い出していく。

いじめられればそれを助ける。気は一見すると強いが実は弱い。
引っ込み思案でうじうじとしたところがある。それは子供の頃から
なのだ。

そんな彼女に言われてパーティーに出る。一応スーツを着てそれ
が開かれる店に向かうがである。一緒に来た遙はというであった。

「ねえ」

「何だよ」

「この格好でいいわよね」

彼女もスーツを着ている。クリーム色の膝までのタイトスカート
をはいている。ジーンズが多い彼女も流石に今は違っていた。

「これで」

「それでいいんじゃないかな」

一見したうえで返す幸平だった。

「その格好で」

「色々考えたのよ」

遙は自信なさげな顔で述べた。

「どんな格好がいいかなって」

「それでか」

「そうなのよ。成人式の時の服で」

「そういえばそうだな」

言われてそれに気付いた幸平だった。

「その服は」

「そうなのよ。やっぱりこれだってね」

「じゃあ行くか」

こうして彼等はパーティーに行く。しかしであった。

彼等はそのパーティーに行くのであった。もう皆集まっっていて楽しいものがはじまろうとしていた。二人も知り合いから歓迎された。

そして自分達の席に座るとであった。主役も来て楽しいものが実際にしまった。それ自体はよかった。だが遥の態度がであった。

「おい」

「何？」

おどおどとした様子で幸平の言葉に応えてきた。

「どうしたのよ」

「どうしたのと聞きたいのはこっちだよ」

怪訝な顔で彼女に告げるのだった。

第三章

「何でそんなに固くなってるんだ？」

「だって」

「だって？」

「知らない人多いし」

だからだというのである。それでおどおどとした態度になっているのだ。

「そうでしょ？見たことない人一杯いるじゃない」

「それはいるだろうな」

幸平は彼女のその言葉を聞いてもこう言うだけだった。

「あいつも。前田だったな」

「ええ」

「高校から違ったよな。それだとだ」

「知らない人も多くなるっていうのね」

「しかも旦那さんの知り合いもいるだろ」

彼はこのことも指摘したのであった。

「それだと知らない人もいて当たり前じゃないかな」

「言われてみればそうだけれど」

「それならそんなに人見知りすることないだろう？」

「わかってるわよ」

口ではこう言いはする。

「それでも。何か」

「ここにいればいいから」

幸平はやれやれといった調子でまた彼女に言った。

「別に何も無いさ」

「そうなの」

「ほら、これ」

遙の前にビールが入ったグラスを差し出す。彼が入れたものだ。

それと食べ物である。サンドイッチや寿司といった簡単なオードブルである。

「楽しくやるんだろ？」

「ええ、そのつもりだけれど」

「じゃあ飲んで食べて」

また遥に対して言う。

「そうしてな」

「ええ」

戸惑いながら幸平の言葉に頷きそのオードブルとビールを飲んでいく。遥はパーティーの間ずっと幸平の傍を離れなかった。そうしてパーティーが終わって帰る時だ。

ビールのせいでふらふらであった。その右肩を幸平に預けて帰っている。幸平は彼女の肩を担いだ状態で声をかけるのであった。

「大丈夫か？」

「大丈夫よ」

また口では言いはした。

「全然ね。大丈夫よ」

「本当か？」

「本当よ」

しかし全然そうは見えなかった。

「だから放っておいてよ」

「そういうわけにもいかないからな」

幸平は今の言葉は退けた。

「帰るか」

「帰るって？」

「帰るっていったら家だよ」

そこしかなかった。

「家にな。送ってくからな」

「有り難う」

彼の今の言葉には素直に礼の言葉を返す遥だった。夜道でふらふ

らになっている。左手は自由だが白いバッグを無造作に振っている。完全に酔っている。

「じゃあ」

「タクシー拾うか」

幸平はここでこう考えた。

「ここは」

「お金あるから」

「俺もあるから」

遥の言葉をそのまま返した形になった。

「それは別にいいよ」

「いいわよ」

「いいから帰るぞ」

ここはもう遥にそれ以上は言わせなかった。丁度通り掛かった空車のタクシーを拾って彼女の家まで送り届ける。玄関のチャイムを鳴らすと早速遥にそっくりの中年の女の人が出て来た。見れば服も普段の彼女の格好と同じジーンズ姿であった。スタイルまで同じである。

「あら、幸平君」

「どうも」

その女性は遥の母である。顔見知りとして挨拶をした。

「いつも悪いわね」

「いえ、別に」

こう返すのだった。

第四章

「それは」

「全く。ちよつと遙」

「何？お母さん」

「ちよつとは幸平君に感謝しなさい」

酔っている娘に対しての言葉だ。顔を真っ赤にしてべろべろになっているその姿はかなりみつともない。少なくとも年頃の娘のものではない。

「本当にいつもいつも」

「いつもいつもじゃないわよ」

「いつもいつもよ」

怒った顔で娘に告げる。

「全く。とにかくね」

「とにかく？」

「家に入りなさい」

こう娘に言うのである。

「いいわね」

「はあい」

「幸平君もね」

ここで遙の母は彼にも声をかけた。

「あがったらいいわ」

「いえ、俺は」

「もう帰るの？」

「ええ。家すぐそこですし」

実は二人は住んでいる場所もすぐ近くなのである。

「ですから」

「そうなの。それじゃあ」

「これで」

「悪いわね。御礼はするからね」

「それはいいですよ」

「そういうわけにはいかないわよ」

この辺りは近所付き合いだった。見知った同士でもある。

「だからね。今度お家に窺うから」

「そうですか」

「ほら、遥」

前に出て娘の左肩を持って行くのであった。

そうして娘を家の中に担ぎ入れる。幸平はそれを見届けてから自分の家に帰る。そして次の日。遥は彼の前に申し訳なさそうな顔で出て来た。

「あのさ、昨日だけれど」

「いいよ」

こう返すだけの幸平だった。

「そんなことはな」

「いいの？本当に」

「いつものことじゃないか」

だからだというのである。

「気にすることはないさ」

「何かそれって私が駄目みたいじゃない」

「別にそうは言ってないさ」

それは否定するのだった。

「ただな」

「ただ？」

「御前お酒弱いんだからな」

遥に言う言葉はこれであった。

「だから控えた方がいいぞ」

「わかったわよ。何かね」

「何か？」

「言い訳になるけれど」

バツの悪い顔で言う遙だった。

「それでもよ」

「それでも？」

「昨日は何か特にお酒にやられたみたいね」

「ビールだけ飲んでたわけじゃなかったからな」

「日本酒飲んだのがまずかったかしら」

自分で分析はした。

「やっぱり」

「そうだな。まあわかったらな」

「日本酒は控えるわ」

こう言うのであった。

「本当にね」

「飲むなどと言わないが量は控えろ」

これが幸平の彼女への言葉だった。

「わかったな」

「わかったわ。まあお酒は残ってないし」

「みたいだな」

「朝起きてお風呂に入ったから」

それで酒を抜いたというのである。二日酔いの解消方としてはオ
ーソドックスであると言えるものであった。少なくとも彼女は問
題なかった。

第五章

「それでね」

「そうか。それでか」

「そういうこと。じゃあ講義ね」

「いいか？」

ようやく大学への話になった。

「それでだけれどな」

「それで？」

「テキストとかは持って来たよな」

「持って来てるわよ」

それはあるというのである。

「ちゃんと用意してあるから」

「だいいいがな」

そんな話をしてそのうえで講義に向かう。遥は幸平の傍にいる。

そうしてそのうえでいつもの通りの学生生活を送るのであった。

そんな二人だった。遥は幸平の傍にいつもいる。そんな彼女を見てある日周りが言ってきた。

「遥ってさ」

「そうよね、何かね」

「前から思ってたけれどね」

言っているのは女の子達だ。遥を意識しての言葉である。

「草加といつも一緒にいるけれど」

「やっぱり付き合ってるの？」

「そうしてるの？」

「付き合ってるって？」

それを言われた遥はきょとんとした顔になって返した。

「そうじゃないけれど」

「けれどいつも一緒にいつじゃない」

「ねえ」

「それって世間では付き合ってるっていうのよ」

「ただの幼馴染みよ」

遥はこう彼女達に返すだけであつた。きよとした顔はそのままである。

「本当にね」

「いや、どう見てもね」

「ねえ」

「付き合ってるじゃない」

彼女達はあくまで自分達の主観において話をする。彼女達からはそう見えるのである。

「ねえ。どう見てもね」

「やっぱりね」

「どう見ても」

「だから違うわよ」

遥はどうして言われるのかわからないといった顔でまた言葉を返した。本当にそれだけであり自覚がないことがわかる返答であつた。

「そんなのじゃないわよ」

「本当にただの幼馴染みなの？」

「それだけ？」

「本当にそれだけなの」

「そうよ、それだけよ」

また答える遥だつた。

「本当にね。それだけだから」

「じゃあキスとかは」

「そういうのもまだなの」

「あはは、そんなのじゃないわよ」

それもないというのである。

「それはね」

「ないの、それって」

「ずっと一緒にいても」

「全然ないのね」

「だから何であるのよ」

きよとんとした顔はそのままだった。何も変わりはない。

「幼馴染みなのに」

「まああんたがそう言うのならいいけれどね」

「それならそれでね」

「別にね」

こう返すだけであつた。とにかく遙にはその意識はなかった。しかし幸平はである。その話を聞いてかなり困った顔になっていた。

「そういえば俺とあいつな」

「ああ、いつも一緒じゃないか」

「いないって言えばこんな時だけだよな」

「だよな」

今彼の周りは男達だけだ。サークルである。

そのサークルは何かというと。非常に変わったものであつた。それは。

第六章

「ザリガニ研究会にいる時だけじゃないか」

「他はいつも一緒にいるよな」

「本当にな」

「まあそうだな」

彼もそれを認めるのだった。

「これは俺の趣味だしな」

「ザリガニがか」

「それはか」

「それはいいんだな」

「この時位だな」

自分でも振り返った。

「俺がこの趣味に没頭している間だけだな」

言いながら水槽の中のザリガニに餌をやる。水槽は幾つもありそのどれにもザリガニ達がいる。砂と水の中で怪獣の如く暴れている。

幸平はそのザリガニ達に餌をやりながらだ。あらためて言うのであった。

「あいつといたいののはな」

「あの娘ザリガニは嫌いなのか？」

「そっちは」

「いや、嫌いじゃない」

それはないというのである。餌は烏賊であった。

「あいつはザリガニは嫌いじゃないんだ」

「嫌いじゃないのか」

「けれどサークルには入らないんだな」

「あっちはバスケの方が好きだからな」

幸平はザリガニ達を見ながら話す。

「だからサークルだけはそっちなんだよ」

「けれど帰るのはいつも二人か」

「二人一緒なんだな」

「ああ、それはな」

それとは返す間もザリガニ達を見ている。

「あいつ一人だと危ないからな」

「危ない？」

「それでか」

「女の子一人の帰り道なんて危ないだろ」

こう言うのである。

「だからな」

「だからか」

「しかしそれって」

「なあ」

仲間達は幸平の今の言葉を聞いて顔を見合わせて言い合う。

「保護者みたいだよな」

「何かそういう感じだよな」

「そうだよな」

「保護者!？」

しかし幸平はそう言われて怪訝な顔になるばかりであった。そうしてこう返すのだった。

「俺があいつの？」

「そうだよ。毎日家まで送ってるんだろ？」

「帰りは」

「行きもな」

そちらもだという。

「送ってるけれどな」

「じゃあやっぱり保護者だよ」

「なあ」

「話を聞くとな」

彼等はまたこう言うのだった。

「彼氏っていうよりな」

「保護者だよ」

「そうだよ」

「そうか、俺は保護者なのか」

幸平はそれを聞いてまた言った。

「何かよくわからないけれどな」

「そういえば御前等って同じ高校だったよな」
「だよな」

「家も近所だったか？」

「そうさ。ついでに言えばな」

お互いの事情をここで話した。

第七章

「幼稚園の頃から一緒だよ」

「幼稚園からか」

「ずっと一緒なのか」

「そうだったのか」

「そうだよ。それで幼稚園の頃からな」

「それだけ昔のことから話をはじめた。」

「行き帰りはずっと送っていたな」

「へえ、そうだったのか」

「そんな時からか」

「ずっと送り迎えしてたんだな」

「そうさ、ずっとな」

「またこのことを話す。」

「ずっとそうしてるけれどな」

「じゃあやっぱり保護者だよな」

「それだよな」

「どう聞いてもな」

彼等は話を聞いてこう述べた。そうとしか聞こえなかった。そうしてであった。

また幸平に顔を向けてだ。彼に対して言うのであった。

「じゃあ草加」

「御前今日もあの娘送るんだよな、やっぱり」

「部活が終わったら」

「ああ、それはな」

当然といった調子で返す幸平だった。

「そうするさ。バイクもあるしな」

「バイクか」

「御前それで通学してたな」

「確かサイドカーだったな」

「そうさ。それでな」

それで送り迎えをしているというのである。

「あいつを脇に乗せてな。昔は自転車だったけれどな」

「あの娘を後ろに乗せてか」

「大昔の青春ドラマみたいだな、それじゃあ」

「夕焼けの中だな」

こんなことも言う彼等だった。話を聞いてそうしたことをついついイメージしてしまったというわけである。学生服姿の幸平とセーラー服の遙も想像してしまった。

その彼等をイメージしながら。さらに言うのであった。

「やっぱり保護者だよな」

「それもお兄ちゃんか？」

「そういう感じだよな」

「やっぱり俺はそれか」

話を聞いてまた言う彼だった。

「保護者なのか」

「そう思えるからな」

「話を聞けばな」

「それじゃあそれでいいんじゃないのか？」

「いいのか」

幸平は今の言葉にふと顔を向けた。

「俺は保護者で」

「と、俺は思うぜ」

肯定した仲間はまた答えた。答えながら自分の前にある水槽の中のザリガニ達を相手に遊んでいる。餌で釣っているのである。

「それならそれでか」

「そういうものか」

「草加、御前今に満足してるだろ」

あらためて彼に問うた。

「じゃあそれでいいじゃないか」

「満足しているのか」

「実際にどうなんだ？」

また彼等に話す。

「満足してるだろ」

「まあ言われてみればな」

実際にその問いに頷くことになった。自然にだ。

「あいつと一緒にいてな」

「それだったらそれでいいじゃないか」

「そうだな。それだったらな」

自分でも頷く彼だった。

「それでいいか」

「そうだよ。じゃあ今日の帰りもな」

「ああ」

「送って来い」

微笑んで彼に言うのだった。そして幸平もまた。素直にその言葉に頷くのだった。

第八章

その日の帰り実際に彼は遙を迎えに来た。学校の門のところにサイドカーをやった。ここが二人のいつもの待ち合わせ場所である。

「来たわね、ザリガニ博士」

「今日もね」

「お熱いことで」

「そんなのじゃないわよ」

遙は周りにいる同じ部の仲間達に困った顔で返す。

「私達はそんな」

「いやいや、否定しなくても」

「別にやっかんでないし」

「からかってるだけだし」

皆笑いながら彼女に言うのであった。ザリガニ研究会と同じ流れであった。

「だから気にしないでいいから」

「リラックスリラックス」

「下校は楽しく帰るものよ」

「そんなこと言われたらリラックスできないわよ」

遙はむっとした顔で彼女達に言い返した。

「私と幸平はね、別にね」

「けれど幼稚園からなんですよ？」

「家も近くよね」

「同じ丁でしょ？」

やはり話の流れは幸平のところと同じであった。違うのは話している面々が今回は女であるということだ。それ以外は何も変わっていないかった。

「それだったらね」

「やっぱり」

「幼馴染みだし」

「幼馴染みでもそんな関係じゃないから
遥はまた彼女達に言い返した。」

「全然」

「まあ彼氏には見えないかな」

「確かにね」

このことも話される。

「っていうかあれは」

「どっちかっていうと」

「お兄さん？」

「そんな感じよね」

「そう、お兄さんね」

彼女達の話の横で聞いていた遥はふと気付いた様に言った。

「それもありかしらね」

「ありなの」

「それでいいの」

「何かそれで絵になってるっていうんでしょ？」

このことを彼女に問う。

「それってつまり」

「まあそうよね」

「絵になってるのはね」

「それは確かね」

皆遥がそのことを受け入れたのを見てまた言う。

「あんたと草加君ってね」

「恋人同士っていうよりはそっちだし」

「それならそれでいいじゃない」

「そうよね」

「あいつってね」

ここで顔を少し俯けさせた遥だった。そのうえでの言葉である。
「あれなのよ」

「あれ？」

「あれって？」

「いつも私の傍にいてそれであだこうだって言って動いて」

これはいつものことである。それも今だけではないのである。彼女はそのことも話した。

「子供の頃からね」

「縁が深いのね」

「本当に」

「そうよ。だからね」

遥はさらに言う。

「それもいいかって。何か幸平には悪いかな」

少しこうしたことも言葉に出て来た。

「私全然頼りないし」

「ふふふ、向こうもそれが気に入ってるんじゃないの？」

「かえってね」

皆笑いながらそのことを言う。

第九章

「案外そういうのもね」

「いいって思ってるんじゃないの？」

「そうかしら」

「だからずっと一緒にいるんじゃない」

「そうよ」

そうだと言うのが皆であつた。その遥に対してである。

「だからね。いいでしょ」

「それじゃあ」

「そういうものかしら」

それを聞いても今一つ以上に不安げな顔である。首を傾げさせての言葉である。

「それって」

「お兄さんなら当然でしょ」

「それもね」

「お兄さんなら」

「そうよ、兄は妹を大事にするもの」

「だからよ」

兄と妹という関係である。それである。

「あんたもそれでいいんでしょ？」

「それならね」

「そういうものなの。だったら」

遥はそれを聞いてだ。また話すのであつた。

少し首を捻ってだ。言葉もいぶかしむながらのものである。

「私はね」

「私は？」

「どうするの？」

「もうそれでいいわ」

それでいいというのである。迷いながらの言葉ではあるがそれだ。

「幸平と離れることなんて考えられないし」

「そうでしょ？ お兄さんだし」

「それならね」

「一緒じゃないと駄目よ」

これは離せないことだった。彼女にとっては絶対である。

「何があってもね」

「それならそれでいいじゃない」

「そうよ。そこまで言うならね」

「やるわ。ただしよ」

彼女の表情が変わってきていた。迷いが少しだけ消えた、そんな顔になってである。

あらたな言葉を出すのであった。その言葉は。

「もうちょっとね。私もね」

「あんたも？」

「どうだっていうの？」

「しっかりできるようになるわ」

そうなるというのである。

「しっかりとね」

「そう。それなら頑張りなさい」

「それじゃあね」

皆もそれで背中を押すのだった。

「頑張って一歩進むのよ」

「あんたもね」

「ええ。じゃあ」

ここで幸平のサイドカーが来た。丁度いいタイミングである。それに乗ってであった。この日は二人で帰る。そして次の日はである。

自分で起きて先に幸平の家に来た。そうして玄関に来たところで

丁度家を出て来た彼に対してそのうえでにこりと笑って朝の挨拶をするのであった。

「おはよう」

「って遙!？」

幸平は玄関の前に立つ彼女の姿を見て驚きの声をあげた。

「もう起きたんだ」

「ちよつとね。目が冴えてね」

こういうことにして話すのだった。

「それでね」

「それでなんだ」

「そうなの」

幸平は遙のその話を聞くだけである。何も疑ってはいない。

「それでなんだ」

「そうなのよ。それでね」

「それで？」

「お昼はね」

そのことも話すのだった。

「お弁当用意してあるから」

「お弁当って？」

「そうよ、お弁当作っておいたのよ」

こう彼に話す。

「二人分ね。いいかしら」

「ええ、それじゃあね」

こう言っただけである。そつと玄関の扉を開けてだ。幸平をそこに誘って話す。

「行きましょう」

「そうだな。それじゃあ」

「一緒にね」

そつと幸平の手を取って腕を絡み合わせてサイドカーに向かう。サイドカーにも二人一緒である。背の高い幸平の横にいる彼女は確

かに妹に見える。だがそれでも。一歩ずつでもしっかりとしだした
彼女だった。

妹みたいで 完

2
0
1
0
・
1
・
2
0

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1726/>

妹みたいで

2010年10月8日15時22分発行